

こもれび 武蔵野市社会教育委員だより

発行日：令和2年2月1日

編集：社会教育委員の会議

発行者：武蔵野市教育委員会

市ホームページではカラー版が
ご覧になれます（右記QRコードから）



全国社会教育研究大会兵庫大会

令和元年10月24日から25日にかけて、神戸ポートピアホールで開催された全国社会教育研究大会に、社会教育委員4名で参加してきました。大会スローガンは『学びと実践の収穫祭』ごこく豊穰 in 兵庫、研究主題は「多様性を認め合う、豊かな地域社会のための社会教育の実践」というものです。初日は映画「スウィングガールズ」のモデルにもなった兵庫県立高砂高等学校ジャズバンド部「Big Friendly Jazz Orchestra」の華やかな演奏から始まります。そのままずっと聴いていたくなるような演奏でしたが、それに続いた平田オリザ氏による記念講演も印象深いものでした。社会教育の役割を模索していた最近の流れを断ち切り、社会教育は学校教育の付け足しではない、むしろ、社会教育はこれからの時代に求められている学校教育の質を変革させていく根幹なのだという主張をされます。このことは、文化活動の活性を支援し、交流の場を広げようとする社会教育委員、自治体の職員、すべてに気づきを促し、エールを送る内容でした。以下に私の感想も交えながら内容を紹介していきたいと思います。

I. 記念講演「わかりあえないことから～多文化共生を目指す演劇教育～」

講演者：平田オリザ氏（劇作家・演出家）

1. 「文脈を理解すること」

話は、最初「多様性」ということの意味から始まります。劇作家らしく、電車で隣り合わせた人に「ご旅行ですか」と話しかける場面設定をどのように考えるかという話題から切り込みます。そこで、我々にはありきたりな場面に対していろいろな文脈(様々な国民性)を想定できることに気づかされていきます。氏は、まったく文化の違う人たちの突飛な行動は容認できるのに、文化が近い場合には分かったつもりになってしまい、却って「まったく同じでない」ことを容認できないのだと指摘します。そして、そのような場合にこそ、相互にわかり合えていないことの「文脈」の違いをしっかりと顕在化させる必要があることを説きます。さらに、「いじめ」を例にして、いじめた側はいじめられた側の気持ちは遠すぎて理解できないのだとこの文脈のズレを説明します。ここで、平田氏は同情よりも共感、同一性よりも共有性という言葉を使います。前者は、本人の「自分事」にはならないとしても、共感としての理解はできるでしょうという示唆であり、後者はさまざまな異なる価値観の集合体で構成されているのが社会であり、その一体ではない重ね合わせのような社会を共有しているのだという意識の持ちようが必要だと説きます。

2. 「幼少期から蓄積された学びの態度：身体的文化資本」

このような多様性の時代に求められる資質能力の変化は、大学入試改革にも現れているといます。インターネットによって知識がオープンになっていく状況で、未来を見据えた大学が考えているのは「何を学ぶか」とい

う知識提供ではなく「誰と学ぶのか」という多様性の場を提供することにあるといいます。問題解決に向けての協働的な学びには、最初に、違う立場から物事を考えている人間が集まることが不可欠であり、その学びの共同体の中で、自他それぞれの立ち位置を俯瞰できるような能力を養成するのがこれからの大学の役割であると述べています。また、協働的な学びの態度として重要な資質としてフランスの社会学者ピエール・ブルデューが提唱する「身体的文化資本」の重要性に言及します。これはマナー、言葉遣いなどのコミュニケーション能力、感性、味覚、など、個人の幼少期からの経験を通して蓄積されてきた資質を意味します。感性に関して言えば、たとえば美術館や博物館、音楽会で触れることのできる「価値あるもの」、「本物」を体験すること、そして、そのような経験から芽生えた知的好奇心が主体的な学びの出発点となっていると指摘します。平田氏は特に協働的な議論に参加する資格として、これらに人種・民族・ジェンダーと性的少数者に対する偏見のなさを加えています。

3. 社会に繋がる事前分配か、孤立した後の事後分配か？

これからの大学や社会が求める能力が身体的文化資産の蓄積に基づいた学びから引き出されてくるのだとすると、これまで学校教育の付け足しのように見られていた社会教育の方が、実は学校教育の根幹であるという逆転した見方ができるようになります。そう考えた場合の問題は、感性を磨き、知的好奇心を触発する場である文化施設の多くが大都市圏に集中していることであり、それが地方との間に見えない文化格差を生じさせていると指摘します。そして、その解消のために、特に地方において社会教育こそが文化政策と教育を重ね合わせ、教育の質を変えていく力になるのだという主張をされます。

この話は、さらに近年若年層よりも多くなってしまった中高年の引きこもりの話に続きます。まず、①日本は宗教が最終的なセイフティネットにはなっておらず、非常に孤立しやすい世界であること、②それ故に孤立する前に手を打つ社会的包摂(ソーシャル・インクルージョン)が重要であること、③これまで利益と機能で繋がる利益社会と地縁血縁で繋がる社会(ゲゼルシャフトとゲマインシャフト)という2つの社会の間に興味や趣味を話題として出入り可能な「関心共同体」が必要であること、を説きます。社会教育が推進しようとしているのは、経済格差が大きくなってから福祉政策として行なう「事後分配」の支援ではなく、この「関心共同体」を通して人と人が繋がることを支援する文化教育活動としての「事前分配」であると指摘します。そして、それは個人と社会の両方に対して破壊力のある孤独死のような破綻を未然に防止することに繋がります。講演は社会教育委員の仕事が自治体の文化政策を担う最前線にあるものとして締めくくられました。

4. 感想

ここでの限られた紙面の中では平田氏の主張していたことをすべて紹介しきれたわけではありません。それでも、「こもれば」の中で伝えなければと思ったキーワードは「身体的文化資本」と「事前分配」のことです。今回の講演では「関心共同体」を通して「人とつながる」ことをしっかり肯定しているすがすがしさを感じました。そして、人と人をつなぐというシンプルな活動の中に社会教育の重要な役割が含まれているということを再認識させられます。さらに、そこに身体的文化資産の蓄積が残っていれば、我々は人生のどこかで「ひきこもり」の深みにはまっても戻ってこられると思えるのです。何度でも新しいことに挑戦していけそうだと思うのです。もし、戻る道が分からなくなったら、新しい仲間がそこに集結していると期待しながら美術館にでも出かけたいと思います。そのようなわけで、武蔵野市の文化資本を確認しようと思い、武蔵野市民芸術文化協会の年刊機関誌「翔」の記念誌第30号を手にとってみました。昨年、協会は創立30周年を迎えられたとのこと。あら？大会にご一緒した荒井委員のお写真とご挨拶も最初のページに掲載されています。そのようなわけで新米社会教育委員の私は所属35団体の活動記録ページをこれまでとは違った目つきでめくっています。現在、武蔵野市では月1回で社会教育委員の会議が開催されていますが、社会教育委員の役割は「つなぐこと」との思いを新たに、この記念講演のエッセンスが反映されるような議論に臨んでいきたいと思っています。

また、ここでもう一つだけ申し上げたいことがございます。それは武蔵野市が募集している「子ども文化・ス

スポーツ・体験活動支援事業」と「生涯学習事業」の2つの補助金申請に関してです。なかなか思ったように補助金が下りなかったり、事業の主張が通らなかったりすることもあるかと思えます。連続して申請できる年限も3年に限られています。その場合には一度活動状況を振り返って申請を続けていただきたくお願い致します。

II. シンポジウムと分科会について

この講演に続いて、シンポジウム「時代潮流の変化の中で多様な地域特性を活かし、高めあう社会教育」が開催され、朴木佳緒留氏（兵庫県社会教育委員）をコーディネーターとして5名のシンポジストが課題を指摘します。男女の職業選択におけるステレオタイプ、外国人には高い言葉の壁や複雑な決まり事の多さ、などなど、多様な価値観の違いが噴き出てきます。そして、住民が学ぶべき側面として、自分で考えるという主体性、試行錯誤を繰り返して自分を鍛えること、他者を尊重する、という指摘が出てきます。地域社会の豊かさとは何かというフロアからの質問に対して、パネリストから「ここにいて良かったと思えること、相手の喜びを自分の幸せと感じられること」という返答がありました。

翌日25日の第3分科会では、「新たな学社連携のかたち 社会教育委員として実践活動から見てきたもの～福島県双葉町との交流事業を通して～」(発表者：澤井安子氏、京丹波町社会教育委員)の発表があり、社会教育委員の発案として京都府の京丹波町が東日本大震災による原発事故で被災した福島県双葉町の復興支援プロジェクトを立ち上げ、物資の支援事業が学校生徒の心の交流事業に深化していった経過が紹介されました。ともすれば時間の流れの中で途切れ途切れになってしまいそうな交流の糸を逆に太くしていく取り組みです。この後、班ごとのグループディスカッションがおこなわれましたが、私(武蔵野市)は京都府宇治田原町、兵庫県新温泉町、京都府向日市、そして相模原市と同じ班になりました。ご挨拶代わりに「こもれび第6号」をお配りし、短い時間ですが、社会教育委員会会議の開催回数や団体補助金の扱いの違いについて情報交換をしました。

ここで、ご一緒した古谷哲矢氏(相模原市社会教育委員)とは、報告書の交換を約束して別れたのですが、早々に的確なまとめをされた報告書をお送り頂き、改めて私の記憶から抜け落ちていた視点(上記傍線部分)をここに加えることができました。ありがとうございます。実は、私がぼーっと聞いていたのがいけないのですが、異なる視点を交換し合う地域交流の実例になりました。このような細いネットワークを離れた地域を互いに見守り合うネットワークに育てていけば、毎年、全国大会に出席する意義は大きいのだと思います。そういえば武蔵野市も平成24年度から東日本大震災で被災した陸前高田市と大槌町に、熊本地震で被災した熊本市と益城町に延べ16名の職員を送っていたことを市のホームページで知りました。これらの糸が細くなっていないか、たぐり寄せる活動に社会教育も参加できるのだと考えています。(板垣文彦)